

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	澤田 淳
論文題目	日本語ダイクシスの語用論的研究—語用論的文法のアプローチ—		
（論文内容の要旨） 本論文は、認知語用論の枠組みに基づき、日常言語におけるダイクシスのメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。全体は8章から成る。 第1章では、ダイクシスの分析の基本的な枠組みとなる認知語用論の基本概念と理論的な枠組みを概説している。 第2章では、語用論を「ミクロからマクロに至るあらゆる言語単位（音韻、形態、語彙、文法、談話・テキスト）における言語使用の諸相をコンテキストとの関わりから研究する言語学の一分野」と定義し、この新たな語用論の視点からダイクシスに関わる言語現象の研究の展望を図っている。さらに以上の展望のもとに、これまでの統語論中心のダイクシス研究を批判的に検討している。 第3章では、ダイクシスと視点の関係についての考察を試みている。本章では、言語学で使用される視点が直示的視点と共感的視点の2種に大別されることを明らかにし、ダイクシスの視点現象を共感的視点から説明している Susumu Kuno の機能的構文論のアプローチの本質的な問題点を指摘している。本章では、直示的視点と共感的視点の本質的な違いとして次の諸点を明らかにしている：（i）直示的視点は、話し手が直示投射先の人物であるかによって規定される、（ii）この視点は、話し手（または直示投射先の人物）に固定される視点であり、参与者間の比較で決まるという特徴を持つ、（iii）直示的視点は、完全な自己同一視化の場合を除き、参与者間の比較の中で決まるという特徴を持つ。本章では、以上の新たな視点の規定に基づき、ダイクシスに関わる視点は、文中の特定の参与者への共感度の大小によって定義される共感度的視点ではなく、話し手自身の事態解釈に関わる直示的視点である点を「行く／来る」、「やる／くれる」に代表される直示動詞に関わる言語現象に基づいて検証している。 第4章では、ダイクシスに関わる直示型の動詞に関し、日・英語の直示型の移動動詞をケース・スタディとして考察している。英語の直示型の移動動詞の分析としては、Charles Fillmore の「come/go の選択原理」の分析があるが、英語の直示型の移動動詞にはこの原理では説明できない事例が存在する。本章では、この問題は、直示性を階層的に位置づける「直示性の階層スケールモデル」を想定することで解決できる点を明らかにしている。本章では、さらに、英語と日本語の直示型の移動動詞の直示性の階層に関して、（i）英語では、話し手と聞き手は直示中心の階層からみて同列にあるのに対し、日本語では、聞き手よりも話し手のほうが直示中心の階層からみて上位にある、（ii）英語と異なり、日本語では、発話時と指示時は直示性の階層の同列に位置づけられる、という相違が認められることを明らかにしている。 第5章では、歴史語用論と対照語用論を統合する歴史・対照語用論のアプローチから、方言や他言語との対照を視野に収めた直示型の移動動詞の運用システムに関わる歴史的分析を行っている。本章では、日本語の直示型の移動動詞の歴史を考える上での最			

大のポイントとなる聞き手領域への話し手の視点移動を示す事例に考察の焦点を絞り、その状況における直示型の移動動詞を古代中央日本語（主に中古和文資料を基にした中古日本語）を対象に考察している。その結果、古代中央日本語は、聞き手領域への話し手の移動に対し「来る」と「行く」の両方が運用されており、「来る」の特殊用法を持つ一部の日本語の方言と同様、「COME・GO併用型」の運用システムに基づいている事実を明らかにしている。

第6章では、日本語の直示型の移動動詞の補助動詞用法（「てくる」、「ていく」）に関して、文法化との関わりから分析を試みている。本章では、まず「てくる」は、「同時移動」、「継起移動」、「移動の方向づけ」、「行為の方向づけ」、「変化型アスペクト」、「継続型アスペクト」、「非意図的事象の出現」の6つの用法を持つのにに対し、「ていく」は、このうちの「行為の方向づけ」と「非意図的事象の出現」の用法がなく、「てくる」と「ていく」が非対称的な意味拡張をなしている点を明らかにしている。本章ではさらに、「行為の方向づけ」の「てくる」に焦点を当てた分析を行い、「行為の方向づけ」の「てくる」の現象を、平原クリー語などの言語に見られる逆行態と同種の人称現象とみなす先行研究を批判的に検討し、両現象が本質的に異なる人称システムに支配された現象である点を指摘している。本章では、さらに日本語の「てくる」と韓国語の come-動詞 (ota) を比較し、日本語では、「行為の方向づけ」の「てくる」は、話し手領域に向かう求心的行為を話し手以外の領域に向かう非求心的行為から区別するための言語指標として生産的に利用しているのに対し、韓国語の come-動詞 (ota) では、この種の「行為の方向づけ」の用法は極めて低い点を指摘している。本章ではこの事実をもとに、日本語と異なり韓国語では、話し手領域に向かう求心的行為と話し手以外の領域に向かう非求心的行為との違いを言語構造の違いに反映させない傾向にある点を明らかにしている。

第7章では、4章から6章までのケース・スタディの分析結果を統合し、日本語の言語システムの中で直示表現が確立するメカニズムを、古代語と現代語の史的対照的な視点から考察している。本章では、授与動詞、移送動詞、敬語動詞、移動動詞、指示詞、敬語に関わる言語現象を取り上げ、日本語が自己（話し手）の領域内の事象と他者（話し手以外）の領域内の事象を言語的に区別する方向に発達し、直示的視点を確立させるに至った事実を、「領域区分化モデル」によって説明している。さらに本章では、「来る」の歴史的変化や行為の方向づけの「てくる」の発達は、(i) 絶対敬語から相対敬語への敬語運用の変化、(ii) ソ系列指示詞の聞き手領域の指示用法の発達、(iii) 授与動詞「くれる」、移送動詞「よこす」、敬語動詞「いらっしゃる」における直示的視点の確立、などのダイクシスに関わる他の言語現象の変化と連動した変化である点を明らかにしている。また本章では、「領域区分化モデル」は、これまで独立して考察されてきた個々のダイクシス現象の歴史的変遷を統一的に捉える一般原理であるが、このモデルが、他言語との比較対照の際にも有効であることを論じている。

第8章では、理論面と実証面からみた本研究の意義と今後の研究の展望について考察している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、認知言語学と語用論の視点を統合した認知語用論の枠組みに基づき、日常言語におけるダイクシスのメカニズムの解明を試みた理論的・実証的研究である。

日常言語のダイクシスに関わる現象は、文法と語用論の接点に関わる現象である。しかし、これまでの研究では、文法は言語能力に関わる部門、語用論は言語運用に関わる部門として区分され、文法と語用論の接点に関わるダイクシスの現象を統合的に分析していく研究は本格的にはなされていない。本研究は、文法と語用論を統合した「語用論的文法」の枠組みを提唱し、この枠組みに基づいて日本語のダイクシスのメカニズムの解明を試みた注目すべき研究である。

本研究は、特に次の点に独創性が認められる。まず本研究は、日本語のダイクシスに関わる言語現象に関し、直示表現を階層的に捉えるダイクシスの階層スケールという新たなモデルを提示した点が挙げられる。これまでのモデルは、直示表現におけるダイクシスの階層性を一般的に捉えるモデルとはなっていない。また、本研究では、直示性を示す表現が言語ごとに異なる点を、直示型の移動動詞のケース・スタディに基づき、ダイクシスの階層性の観点から明らかにしている点に独創性が認められる。特に本研究では、英語と日本語の直示型の移動動詞の階層に関し、(i) 英語では、話し手と聞き手は直示中心の階層において同列にあるのに対し、日本語では、聞き手よりも話し手が直示中心の階層において上位にある、(ii) 英語と異なり、日本語では、発話時と指示時は直示中心の階層の同列に位置づけられる、という2点の相違が認められることを明らかにした点が注目される。

次に、本研究は、日本語の直示表現の歴史的変遷を、「領域区分化モデル」という統一的モデルによって説明している点が注目される。本研究では、授与動詞、移送動詞、敬語動詞、移動動詞、指示詞、敬語に関する直時表現の歴史的変化の方向性として、自己の領域内の対象と他者の領域内の対象とを言語的に区別する領域区分化の方向性が認められることを指摘している。本研究は、これまで個々に分析されてきた様々な直示表現の歴史的な変化を、領域区分化の視点から統一的に捉えた点に独創性が認められる。この領域区分化モデルは、他言語との対照を行う際にも有効な視点であり、今後のダイクシスの類型論研究や対照研究の基本モデルとなり得る点でも重要な意義が認められる。

また本研究は、言語学における視点を共感的視点と直示的視点とに峻別し、ダイクシスには後者の直示的視点に関与することを明示的に示した点が挙げられる。本章では、直示的視点と共感的視点の本質的な違いとして次の諸点を明らかにしている点が特に重要である：(i) 直示的視点は、話し手か直示投射先の人物であるか否かによって規定される、(ii) この視点は、話し手（または直示投射先の人物）に固定される視点であり、参与者間の比較の中で決まるという特徴を持つ、(iii) 直示的視点は、完全な自己同一視化のケースを除き、参与者間の比較の中で決まるという特徴を持つ。本研究は、以上の新たな視点の規定に基づき、ダイクシスに関わる視点は、文中の特定の参与者への共感度の大小によって定義される共感度的視点ではなく、話し手自身の事態解釈に関わる直示的視点である点を、「行く／来る」、「やる／くれる」に代表される日本語の直示動詞に関わる言語現象に基づいて綿密に検証している。また本

研究は、共感的視点によって分析されてきた日本語のダイクシス研究の本質的問題を具体的な反例によって示し、ダイクシスは直示的視点から分析すべきであることを主張している。本研究は、視点のメカニズムの解明に向けた基礎的研究ともなり得る点で、認知科学の視点研究・視覚研究に対する言語学からの貢献につながる。この点で、本研究における提案は、今後の視点研究のあり方の1つの指針になると言える。

さらに本研究は、日本語のダイクシス表現の認定テストを提示した点に意義がある。従来のダイクシスの研究では、問題の言語表現をどの点において直示表現とみなすかに関する明示的なテストは提示されていない。本研究で提出した直示表現の認定テストは、与えられた言語表現のダイクシス性の認定の客観的な指針として重要な役割を果たすものと言える。

これまでの理論言語学の研究では、歴史的（ないしは通時的）な観点からのダイクシスの研究は本格的にはなされていないが、本研究では、さらに歴史語用論と対照語用論を融合させた「歴史・対照語用論」の観点から、方言や他言語との対照を視野に収めた日本語の直示型の移動動詞の運用システムの歴史的研究を行っている。特に本研究では、直示型の移動動詞の歴史を考える際に重要な要因となる「聞き手領域への話し手の移動」を表す事例に注目し、この状況における直示的移動動詞の運用実態を、古代中央日本語（主に中古和文資料を基にした中古日本語）を対象に綿密に調査している。この分析では、特に授与動詞、移送動詞、敬語動詞、移動動詞、指示詞、等に関わる現象を取り上げ、日本語が自己（話し手）の領域内の事象と他者（話し手以外）の領域内の事象とを言語的に区別する方向に発達し直示的視点を確立させるに至った事実を、「領域区分化モデル」によって説明している点が重要である。「領域区分化モデル」は、これまで独立して考察されてきた日本語の個々の直示現象の歴史の変遷を統一的に捉えるための一般原理であるが、本研究では、この領域区分化の視点が他言語との比較対照の際にも有効である点を示している点に独創性が見られる。

直示表現に関わる言語現象は、照応現象、話題化、テキストの結束性、等の言語現象とも密接に関わる現象である。本研究では、前者の言語現象の背後にあるダイクシスのメカニズムと後者の言語現象の関係は直接には考察されていない。しかし、ダイクシスのメカニズムに関し本研究で得られた知見は、これらの関連現象の研究のための基礎的研究としても重要な意味をもつ。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年1月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降